Title	小学校音楽教育における読譜指導の現状と課題 ： 現行教科書の分析を通して
Author(s)	池上, 真理子
Citation	聖学院大学論叢, 第 26 巻第 2 号, 2014.3：229-245
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4856
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

〈原著論文〉

小学校音楽教育における読譜指導の現状と課題
――現行教科書の分析を通して――

池　上　真理子

抄　録

学校音楽教育において読譜指導は，長年の懸案事項である。9年間の義務教育の中で，楽譜を読むという，音楽活動における最も重要な基礎能力を，満足に身に付けることのできない児童生徒が大部分を占めるという現状に対し，現場では未だ満足のいく答えを見出せないでいる。このような現状を踏まえ，本稿は，小学校音楽教育における読譜指導の現状を知る手がかりとして，現行の音楽教科書において，読譜に関する内容がどのように扱われているのかを調査，分析した。その結果，全3社の教科書の読譜指導の内容は，低学年では，ほぼ同じような体裁，量であるが，中高学年になると，扱う量にかなりの差が見られた。また，「移動ド」の扱い方，読譜の訓練量の不足などいくつかの課題も見えてきた。

キーワード；読譜指導，小学校音楽教科書，移動ド

1．序

学校音楽教育において読譜は，大切な基礎能力として認識されていながら，長年，満足のいく指導成果をあげられていない領域である。学習指導要領の中では「基礎的な表現の能力」に含まれるものとして各学年の達成目標に掲げられているが，実際には9年間の義務教育の中で十分な読譜力を身に付けさせることは難しいのが現状である。

杉江の調査によると（杉江，2009），小学校教師の94％，中学教師の98％が児童生徒の楽譜を読む能力に不足を感じているという。そして10年以上前の子どもと比べて，児童生徒の読譜能力が「低下した」と感じている教師が，小学校で40％，中学校で53％にのぼるという[(1)]。大学の教員養成課程の学生たちを見ていても，個人的に楽器を習ったことのない者では，楽譜を満足に読むことができないという状況はごく一般的である。

このような現状を踏まえ，本稿は，学校音楽教育における読譜指導の現状を知るための手がかり

人間福祉学部・児童学科
論文受理日 2013年11月11日

として，基礎習得の大切な時期である小学校の現行教科書で，読譜がどのように取り上げられているのかを調査，分析し，その課題について考えていくことを目的とする。

調査方法は，平成20年の新学習指導要領に対応して作られた平成25年刊行の現行教科書，全3社，全学年のものにおける読譜に関する内容を項目別に分析，比較するという形で行う。その前提としてまず，これまでの学習指導要領において，読譜がどのように扱われてきたのかを概観した後，新学習指導要領の内容を詳しく見ていく。

2．学習指導要領における読譜に関する内容の変遷

学制が発布された明治5年以来，音楽教育は「唱歌科」として，歌を唄うことが内容のほとんどを占めていたが，1941年（昭和16年）の「国民学校令」により，その内容が大きく変更された。唱歌は「芸能科音楽」という名称に改められ，歌唱の他に，鑑賞，器楽，楽典，聴音といった領域が新たに加えられた。歌唱指導では，初等科第2学年までが聴唱法，第3学年以降は視唱法が原則とされ，戦時中の軍の方針で，イロハの日本音名による絶対音感教育が行われた[(2)]。

1947年（昭和22年），「教育基本法」および「学校教育法」が公示され，それに基づき同年「学習指導要領音楽編（試案）」が公示された。学習領域には，歌唱，器楽，創作，鑑賞，およびそれらの活動のための基礎知識，技能の習得が含まれた。読譜に関しては，総括目標に「楽譜を読む力及び書く力を養う」という項目が掲げられ，視唱や視奏で扱われる調は6つ以上とされた。また，イロハ音名唱法はドレミ階名唱法に改められた[(3)]。

1951年（昭和26年）に改訂された試案では，学年ごとに，読譜や記譜に関する内容が具体的に細かく指示されている。視唱，視奏で扱われる調はシャープ，フラット3つまでの長調と，それらの関係短調と日本旋法の中から若干数の計7つ以上で，学ぶべき音符，記号，用語の数も53個と，今よりもかなり高度な内容が示されている[(4)]。

1958年（昭和33年），学習指導要領は「試案」から法的な拘束力を持つものとして改訂された。各学年の目標には，必ず記譜に関する項目が一つ掲げられている。第3学年から視唱が開始され，第5学年の創作では，聴音や記譜も取り入れられる。視唱，視奏で取り上げる調性はシャープ2つまでの長調とシャープ1つまでの短調，フラット1つまでの長調，短調の計7つ，音符，記号，用語等は46個とされた[(5)]。

1968年（昭和43年）の改訂では，鑑賞，歌唱，器楽，創作の学習領域に新たに「基礎」領域が加えられ，読譜はこの基礎領域として独立した位置づけで示されるようになった。総括目標には「音楽的感覚の発達を図るとともに，聴取，読譜，記譜の能力を育て，楽譜についての理解を深める」と読譜指導の重要性が明記され，各学年の目標にも読譜に関する内容が掲げられている。写譜や視唱，視奏で取り上げられる調性はシャープ1つまでの長調，短調，フラット1つまでの長調，短調

の計６つと同じ調号をもつ日本旋法，音符，記号，用語等は53個とされた[6]。読譜指導の内容が，現在よりかなり高度かつ具体的であったのは，この改訂期までである。

1977年（昭和52年）の改訂以降，学習領域が「表現」と「鑑賞」の２領域に統合される。ゆとりと充実を標榜するこの改訂では，指導内容の過密化に対する対応として，具体的な指導内容が削減され，必要最低限の事項が示されるようになる。読譜に関しては，視唱よりも聴唱を重視する方針から，取り上げられる調性はシャープ，フラット１つまでの長調，短調の計４つ，音符，記号等も35個と，大幅に削減された[7]。

1989年（平成元年）の改訂では，それまでの学年ごとの目標が２学年ずつまとめて示されるようになった。視唱，視奏で扱われる調は前回と同じ４つ，記号等は36個である[8]。

1998年（平成10年）の改訂では，各学年の目標，内容は共に２学年ずつまとめて示される形になった。読譜に関しては，視唱，視奏で扱われる調が，前回までの４つから更に減って，調号のないハ長調とイ短調の２つのみになった。また音楽関係記号も，30個に削減され，学年別の指導項目ではなく「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」の中にまとめて示されるようになる[9]。

以上の学習指導要領の変遷を見てみると，戦後の小学校音楽教育の中で，読譜指導に関する内容はどんどん縮小，簡素化される流れであったことが分かる。冒頭で触れた教師たちの児童生徒の読譜力に関するアンケート結果[10]をみても，児童生徒の読譜力が徐々に下がってきていることと，学習指導要領における読譜指導の内容の縮小には，明らかな因果関係があるといえよう。

３．新学習指導要領における読譜に関する内容

2011年（平成23年）の改訂は，総括目標，内容共に基本的には前学習指導要領を踏襲しているが，大きな変更点は，これまでの表現，鑑賞の領域に，それらに関する能力を育成する上で共通に必要となる「共通事項」が新設されたことである。「共通事項」の指導にあたっては，「音楽を形づくっている要素や音符，休符，記号や音楽にかかわる用語を，表現および鑑賞の各活動と関連させて，児童が学ぶ意義を感じながら音楽活動の中で生かして習得していくような指導の工夫が必要」であるので，「教師があらかじめ教えてしまうものではなく，児童が自分で発見し自分の言葉で言い表すようにしていくように指導すること」が大切であると述べられている[11]。

まず，小学校音楽の総括目標は，「表現及び鑑賞の活動を通して，音楽を愛好する心情を音楽に対する感性を育てるとともに，音楽活動の基礎的な能力を培い，豊かな情操を養う。」とある。読譜の領域は，２学年ごとの目標にある「基礎的な表現の能力」を「育て」（第１，２学年），「伸ばし」（第３，４学年），「高める」（第５，６学年）いう項目の中に含まれる。

以下，読譜に関する内容を見ていく。

【第1，2学年】

2　内容　A表現　「⑴　ア　範唱を聴いて歌ったり，階名で模唱したり暗唱したりすること」

「⑵　ア　範奏を聴いたり，リズム譜などを見たりして演奏すること」

［共通事項］

「⑴　「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して，次の事項を指導する。

ア　音楽を形づくっている要素のうち次の㈠及び㈡を聴き取り，それらの働きが生み出すよさや面白さ，美しさを感じ取ること。

㈠　音色，リズム，速度，旋律，強弱，拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴付ける要素

㈡　反復，問いと答えなどの音楽の仕組み

イ　身近な音符，休符，記号や音楽にかかわる用語について，音楽活動を通して理解すること。」

【第3，4学年】

A表現　⑴　ア　範唱を聴いたり，ハ長調の楽譜を見たりして歌うこと。

⑵　ア　範唱を聴いたり，ハ長調の楽譜を見たりして演奏すること。

［共通事項］（第1，2学年に掲載）

【第5，6学年】

A表現　⑴　ア　範唱を聴いたり，ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌うこと

⑵　ア　範奏を聴いたり，ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして演奏すること。

［共通事項］（第1，2学年に掲載）

第3　指導計画の作成と内容の取扱い

1⑴　第2の各学年の内容の［共通事項］は表現及び鑑賞に関する能力を育成する上で共通に必要となるものであり，表現及び鑑賞の各活動において十分な指導が行なわれるよう工夫すること。

2⑵　和音及び和声の指導については，合唱や合奏の活動を通して和音のもつ表情を感じ取ることができるようにすること。また，長調及び短調の楽曲においては，Ⅰ，Ⅳ，Ⅴ，及びV_7などの和音を中心に指導すること。

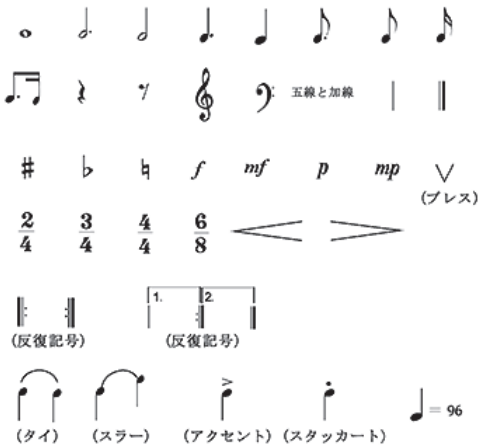
⑶　歌唱の指導については，次のとおり取り扱うこと。

ア　相対的な音程感覚を育てるために，適宜，移動ド唱法を用いること。

⑸　音楽づくりの指導については，次のとおり取り扱うこと。

イ　つくった音楽の記譜の仕方について，必要に応じて指導すること。

⑹　各学年の［共通事項］のイの「音符，休符，記号や音楽にかかわる用語」については，児童の学習状況を考慮して，次に示すものを取り扱うこと[12]。



以上の読譜に関する内容の６年間の流れは以下の通りである。

① 第１，２学年：読譜に慣れる予備段階として，歌詞や階名による手本を聴いて歌う「模唱」，手本を聴いたり，リズム譜を見たりして演奏する「模奏」のみの学習。

② 第３，４学年：楽譜を読んで歌ったり，演奏したりする「視唱」，「視奏」の学習が開始。扱う調はハ長調のみ。

③ 第５，６学年：「視唱」，「視奏」にイ短調が加わる。

④ ［共通事項］に含まれる音楽の諸要素，音符，休符，記号や音楽にかかわる用語は，全学年を通じ，音楽活動に応じて随時取り上げる。

⑤ 和音，和声の学習の学年指定はなく，合唱，合奏の中でその表情を感じ取るよう指導する。内容は，長調・短調の楽曲の，Ⅰ，Ⅳ，Ⅴ，V_7が中心。

⑥ 歌唱指導においては，適宜移動ド唱法を用いる。

⑦ 記譜は創作活動の中で，必要に応じて取り上げる。

４．現行教科書における読譜指導に関する内容の比較

次に，学習指導要領の内容に依拠した教科書の中で，読譜がどのように取り上げられているのかを見ていきたい。

〈調査方法〉

2011 年の新学習指導要領の実施に伴い一新された現行３社の教科書（小原，2011），（三善，2011），（湯山，2011）の全学年のものを調査した。方法は，読譜に関する内容をいくつかの項目に分類し，それに関わる曲数や内容，単元名，項目名などを表にまとめ分析した。

表は，読譜の予備段階の１，２学年では３社を比較できる形に，視唱，視奏が開始して以降の３，

４，５，６学年では，学年指定のない項目も多く含まれるため，各社の全体的な流れを把握できるような形にした。

以下，それぞれの項目について，各社教科書の内容を検証していく。（表1～表9参照）

①　教材の調性と曲数

全学年を通じて，各社30曲前後の歌唱教材，器楽教材，歌唱・器楽共通の教材が掲載されている。教科書の主要部分である教材の調性がどのようなものであるのかは，６年間を通じて，視唱，視奏がハ長調とイ短調の２つに限定されている状況で，どの程度の数の楽譜を読みながら活動できるのかを知る上で重要だと思われるので，すべて集計した。なお，歌唱・器楽共通の教材は，どちらの項目にも曲数をカウントしている。

まず，１学年の歌唱教材では，ハ長調のものが，Ａ社：62%，Ｂ社：56%，Ｃ社：41%，同じく２学年では，Ａ社：56%，Ｂ社：50%，Ｃ社：31%と，Ｃ社以外はハ長調が半数以上を占めている。器楽教材は鍵盤ハーモニカの演奏がメインであることから，３社ともすべてハ長調であった。

３，４学年になると，歌唱教材は，各社共40%前後がハ長調で，その他１，２学年には出てこなかった短調（イ，二，ハ）や，数は少ないが，シャープ２つ，フラット３つの長調も出てくる。器楽教材は３学年からリコーダーがメインになってくるが，そこには，シャープ，フラット各１つまでの長調，短調が出てくる。しかし，学習指導要領では，シャープ，フラットが付く調の視奏は学習内容に入っていない。この原則に従うとすると，これらの調を演奏する際は，楽譜を読まないで模奏を聴いて（見て）演奏するということになるのだろうか，という疑問が出てくる。

５，６学年の歌唱教材では，各社共，ハ長調の比率が20～30%前後，イ短調が８%前後と減り，教材の調性はますます多様になってくる。シャープ２つ，フラット３つまでの長調と，シャープ１つ，フラット３つまでの短調が出てくる。ただし，どんなに調性のヴァリエーションが増えても，楽譜を読んで歌ったり，演奏したり出来るのはハ長調とイ短調のみなので，高学年になる程，楽譜を読んで歌える曲数が少なくなってしまうという矛盾が出てくる。歌唱の場合は，移動ド唱法を用いれば，調性に関係なく歌うことができるというメリットがあるので，楽譜を読んで歌える曲数を増やすためにも，視唱で取り上げることのできる調性の幅はもっと広げてもいいのではないだろうか。

②　リズム学習に関する内容と曲数

１，２学年では，器楽の指導にリズム譜を用いるよう指示されている。１学年の段階では，各社共，大きな玉の中（あるいは下）に「たん，うん」のリズムを表す言葉が書かれた簡易リズム譜を用い，リズム唱や手拍子で練習した後，カスタネット，タンバリンなどの打楽器でたたくように進められている。３社を比較すると，Ａ社が１，２学年共，リズムの単元を14ページと最も多くの内

表１　【A 社　１，２年生】

	教材の調性（曲数）	リズム（曲数）/◆単元名（頁数）	階名（曲数）/◆単元名（頁数）	共通事項/●項目名（頁数）
1年	【歌唱教材】 ハ長調（16）62% ヘ長調（6） ト長調（1） 日本旋法（3） 【器楽教材】 ハ長調（7）	簡易リズム譜（7） （玉の中に、たん、うんのリズム唱付） ◆はくをかんじとろう（4頁） ◆はくにのってリズムをうとう（10頁）	階名付の文字譜（7） （ピアニカ指番号付） 階名付の文字譜（1） （歌唱用・ピアニカ指番号なし） ◆おとのたかさにきをつけてうたおう 片手の音高ジェスチャー（2頁）	
2年	【歌唱教材】 ハ長調（15）56% ヘ長調（7） ト長調（2） 日本旋法（3） 【器楽教材】 ハ長調（6）	リズム譜（6） （標準的なリズム譜） ◆はくのまとまりをかんじよう（6頁） （2拍子，3拍子の練習） ◆はくにのってリズムをうとう（8頁）	階名付の文字譜（3） （ピアニカ指番号付） 階名付の五線譜（3） （ピアニカ指番号付） 階名付の文字譜（1） （歌唱用・ピアニカ指番号なし） ◆音のたかさに気をつけてうたおう ドレミたいそう（8頁）	●「あたらしくおぼえること」 （音符，休符，記号，用語） ●「いろいろな音ぷ・休ふ」 （巻末・一覧表）

表２　【B 社　１，２年生】

	教材の調性（曲数）	リズム（曲数）/◆単元名（頁数）	階名（曲数）/◆単元名（頁数）	共通事項/●項目名（頁数）
1年	【歌唱教材】 ハ長調（14）56% ヘ長調（8） ト長調（1） 日本旋法（2） 【器楽教材】 ハ長調（6）	簡易リズム譜（3） （玉の中に、たん、うんのリズム唱付） ◆わくわくリズム（8頁）	階名付の文字譜（4） （ピアニカ指番号付） 階名付の文字譜（1） （歌唱用・ピアニカ指番号なし） ◆どれみとなかよし（6頁）	●「音楽のもと」まとめ（半頁）
2年	【歌唱教材】 ハ長調（15）50% ヘ長調（10） ト長調（3） 日本旋法（2） 【器楽教材】 ハ長調（6）	簡易リズム譜（1） （玉の中に手拍子マーク付） リズム譜（7） （標準的なリズム譜） ◆ことばでリズム（6頁）	階名付の五線譜（6） （ピアニカ指番号付） 階名付の五線譜（1） （歌唱用・ピアニカ指番号なし） ◆楽しくドレミ（4頁）	●音符，休符，記号，用語 （教材中，頁右上の色枠内） ●「音楽のもと」まとめ（1頁） ●音ぷや休ふ （巻末・一覧表）

表３　【C 社　１，２年生】

	教材の調性（曲数）	リズム（曲数）/◆単元名（頁数）	階名（曲数）/◆単元名（頁数）	共通事項/●項目名（頁数）
1年	【歌唱教材】 ハ長調（9）41% ヘ長調（5） ト長調（4） ニ長調（1） 日本旋法（3） 【器楽教材】 ハ長調（3）	簡易リズム譜（6） （玉の下にたん・うんのリズム唱付） ◆リズムにのってあそぼう（6頁）	階名付の文字譜（4） （ピアニカ指番号付） 階名付の文字譜（1） （歌唱用・ピアニカ指番号なし）	
2年	【歌唱教材】 ハ長調（8）31% ヘ長調（8） ト長調（3） ニ長調（2） 変ロ長調（2） 日本旋法（3） 【器楽教材】 ハ長調（4）	リズム譜（7） （標準的なリズム譜） ◆リズムにのってあそぼう（6頁）	階名付の五線譜（5） （ピアニカ指番号付） 階名付の五線譜（1） （歌唱用・ピアニカ指番号なし）	●「おぼえよう」 （音符，休符，記号，用語）

表4　【A社　3，4学年】

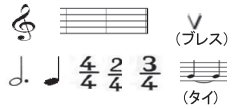
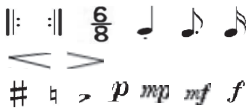
	教材の調性(曲数)	階名・音名(曲数)/◆単元名(頁数)	音階(長調・短調)/●項目名	共通事項/◆項目名/●単元名
3年	【歌唱教材】 ハ長調(10)42% ヘ長調(5) ト長調(6) 日本旋法(3) 【器楽教材】 ハ長調(5) ト長調(4) 日本旋法(2)	階名唱用の楽譜(2) (階名ふりがな付) 階名唱用の楽譜(1) (階名ふりがななし) ◆楽譜を読もう(4頁) ★「階名」(ドレミ)についての説明 ●「記号・音符・休符の書き方」	●ハ長調とイ短調の音階 (巻末・一覧表)	●「新しくおぼえること」  ●「音楽のしくみ」(2頁) (曲のまとまりのひみつ) ◆拍のながれにのろう(6頁) ●「いろいろな音符・休符・記号」 (巻末・一覧表)
4年	【歌唱教材】 ハ長調(11)42% ヘ長調(7) ト長調(2) イ短調(2)8% 日本旋法(4) 【器楽教材】 ハ長調(3) ト長調(3) イ短調(3) 日本旋法(2)	階名唱用の楽譜(4) (階名ふりがなし) 視奏用の楽譜(1) (リコーダー/ピアニカ) ◆楽譜を読もう(6頁) ★「音名」(イロハ)について (発展学習扱い) ●「音符・記号の書き方」	●長調の音階(1頁) ★音名(イロハ)について ★「ハ長調」について (発展学習扱い)	●「新しくおぼえること」  ●「音楽のしくみ」(2頁) (曲のまとまりのひみつ) ◆拍のながれにのろう(6頁) ●「いろいろな音符・休符・記号」

表5　【A社　5，6学年】

	教材の調性(曲数)	階名・音名(曲数)/◆単元名	音階(長調・短調)/●項目名	和音・和声	共通事項/●項目名
5年	【歌唱教材】 ハ長調(10)37% ヘ長調(6) ト長調(2) ニ長調(1) イ短調(2)7% ニ短調(2) ホ短調(1) 日本旋法(3) その他旋法(2) 【器楽教材】 ハ長調(4) ヘ長調(1) イ短調(3)	視唱のための楽譜(1) (ハ長調) 視奏のための楽譜(1) (イ短調) ◆楽譜を読もう(4頁)	●長調と短調の音階(1頁) ★「音名」(イロハ)について (発展学習扱い) ★「ハ長調」「イ短調」 について (発展学習扱い) ●「いろいろな調の音階」 「ハ長調」「イ短調」 ★「ヘ長調」★「ニ短調」 (巻末・一覧表)	●「長調の和音」 「ハ長調」 Ⅰ, Ⅳ, Ⅴ, Ⅴ7 ◆和音の美しさを 味わおう(8頁)	●「新しく覚えること」 ●「音楽のしくみ」(2頁) ●「ヘ音記号の楽譜」(半頁) ●「色々な音符・休符・記号」
6年	【歌唱教材】 ハ長調(6)24% ヘ長調(10) ニ長調(3) 変ロ長調(3) イ短調(2)7% ホ短調(1) 日本旋法(2) 【器楽教材】 ハ長調(3) ヘ長調(2) イ短調(2) ニ短調(1) ホ短調(1)	視唱のための楽譜(1) ◆楽譜を読もう(4頁)	●「色々な調の音階」 「ハ長調」「イ短調」 ★「ヘ長調」★「ニ短調」 (巻末・一覧表)	●「短調の和音」 「イ短調」 Ⅰ, Ⅳ, Ⅴ, Ⅴ7 ◆和音の美しさを 味わおう(8頁) ●ハ長調とイ短調 の和音 (巻末・一覧表)	●「新しく覚えること」 ♩=120 ●「音楽のしくみ」(2頁) ●「色々な音符・休符・記号」

★=発展事項

表６　【B 社　３，４学年】

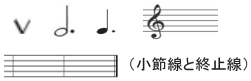
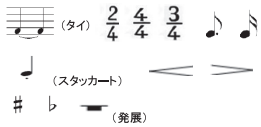
	教材の調性（曲数）	階名・音名（曲数）/●項目名	音階（長調・短調）/●項目	共通事項/●項目名
3 年	【歌唱教材】 ハ長調（11）39% ヘ長調（3） ト長調（7） ニ短調（2） 日本旋法（4） その他旋法（1） 【器楽教材】 ハ長調（4） ト長調（6） ヘ長調（1） イ短調（1） 日本旋法（3）	階名唱用の楽譜（2） （階名ふりがな付） 階名唱＋視奏用の楽譜（1） ●楽譜とドレミ（2頁） ●ドレミで楽しく歌おう（2頁）		●音符・休符・記号・用語 （教材中，頁右上の色枠内）  （小節線と終止線） ●「音楽のもと」まとめ（1頁） ●共通事項の音楽の要素 （各教材の右上の色枠内に留意すべき要素を表記） ●「楽ふのお話」（1頁） （音符の長さ・五線譜） ●「音ぷや休ふ記号など」（巻末・一覧表）
4 年	【歌唱教材】 ハ長調（13）42% ヘ長調（4） ト長調（3） 変ホ長調（2） イ短調（2）6% ニ短調（2） ハ短調（1） 日本旋法（4） 【器楽教材】 ハ長調（6） ト長調（1） イ短調（1） ニ短調（1） ホ短調（1） 日本旋法（2）		●音階から音楽をつくろう （5，6，7音音階から曲を創作）　（3頁）	●音符・休符・記号・用語  （タイ） （スタッカート） （発展） ●「音楽のもと」まとめ（1頁） ●共通事項の音楽の要素（各教材） ●「拍の流れにのって指揮をしてみょう」 （2頁） ●「音ぷや休ふ、記号など」（巻末・一覧表）

表７　【B 社　５，６学年】

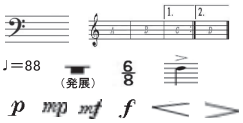
	教材の調性（曲数）	階名・音名（曲数）	音階（長調・短調）/●項目名	和音・和声/●項目	共通事項/●項目名
5 年	【歌唱教材】 ハ長調（5）18% ヘ長調（8） ト長調（5） ニ長調（1） 変ロ長調（1） 変ホ長調（1） ニ短調（2） ホ短調（2） 日本旋法（3） 【器楽教材】 ハ長調（3） イ短調（3） ニ短調（1） 日本旋法（1）		●「ハ長調の音階」 （楽譜のみ・説明なし）	●ハ長調の主な和音 Ⅰ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅴ７ （2頁）	●音符・休符・記号・用語  ♩＝88 （発展） ●「音楽のもと」まとめ（1頁） ●共通事項の音楽の要素（各教材） ●「ヘ音記号」について （階名と鍵盤を対応させて解説） ●「音ぷや休ふ・記号など」（巻末・一覧表）
6 年	【歌唱教材】 ハ長調（6）23% ヘ長調（6） ト長調（5） ニ長調（3） 変ロ長調（1） 変ホ長調（1） イ短調（2）8% 日本旋法（2） 【器楽教材】 ハ長調（4） ヘ長調（2） ト長調（2） イ短調（1） ニ短調（1） 日本旋法（1）		●「イ短調とハ長調」 （階名と鍵盤で説明） （1頁）	●イ短調・ハ長調よく使われる和音 Ⅰ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅴ７ （1頁） ●循環コードから音楽を作ろう （2頁）	●音符・休符・記号・用語 （発展） ●「音楽のもと」まとめ（1頁） ●共通事項の音楽の要素（各教材） ●「音ぷや休符・記号など」（巻末・一覧表）

表8　【C社　3，4学年】

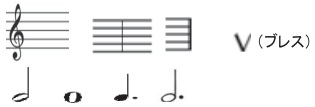
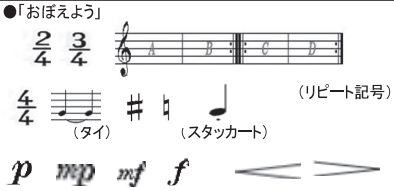
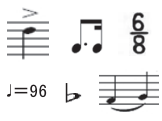
	教材の調性(曲数)	階名・音名(曲数)	音階(長調・短調)	共通事項/●項目名
3年	【歌唱教材】 ハ長調(14)44% ヘ長調(3) ト長調(8) ニ長調(2) ニ短調(1) 日本旋法(4) 【器楽教材】 ハ長調(10) ニ短調(1) 日本旋法(1)	階名唱用の楽譜(2) (階名ふりがな付) 階名唱＋視奏用 の楽譜(1) (リコーダー用) (階名ふりがな付) 階名唱＋視奏用の 合奏譜(1) (階名ふりがななし)		●「おぼえよう」(音符，休符，記号，用語)  ●「楽譜のやくそく」(巻末・一覧表)
4年	【歌唱教材】 ハ長調(14)52% ヘ長調(2) ト長調(5) ニ長調(1) 変ホ長調(1) ハ短調(1) 日本旋法(3) 【器楽教材】 ハ長調(8) ト長調(3) 日本旋法(1)			●「おぼえよう」  ●「楽ふのやくそく」(巻末・一覧表)

表9　【C社　5，6学年】

	教材の調性(曲数)	階名・音名(曲数)	音階(長調・短調)/●項目名	和音・和声/●項目名	共通事項/●項目名
5年	【歌唱教材】 ハ長調(6)24% ヘ長調(8) ト長調(5) 変ロ長調(2) イ短調(3)12% 日本旋法(1) 【器楽教材】 ハ長調(5) ヘ長調(3) ト長調(2) イ短調(4) 日本旋法(1)	階名唱用の楽譜 (短調)(1) 階名唱用の楽譜 (長調)(2) ヘ音記号の階名唱 ・視奏譜(1)	●ハ長調の音階・イ短調の 音階(楽譜・階名・音名) ●ハ長調とイ短調の音階 (巻末・一覧表)	●ハ長調の主な和音 Ⅰ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅴ7(2頁) ●自分で作曲した旋律に 和音付けする Ⅰ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅴ7(2頁)	●「覚えよう」  ●「ヘ音記号」について (階名と鍵盤を対応させて説明) (音名イロハのふりがな付) ●「楽ふの約束」(巻末・一覧表)
6年	【歌唱教材】 ハ長調(6)25% ヘ長調(5) ト長調(3) ニ長調(2) 変ロ長調(1) 変ホ長調(2) イ短調(2)8% ホ短調(1) 日本旋法(2) 【器楽教材】 ハ長調(1) ヘ長調(2) ト長調(2) イ短調(3) ニ短調(1) 日本旋法(1)		●ハ長調とイ短調の音階 (巻末・一覧表)		●「記号の復習」 ●「楽譜の約束」(巻末・一覧表)

容を取り上げている。２学年になると，各社共，簡易リズム譜から，四分音符，四分休符などの音符による標準的なリズム譜になり，八分音符のリズムも出てくる。学習指導要領でリズム譜を使って学習するという項目があるのは１，２学年までであるが，各社３，４学年でも，リズムをテーマとした項目を取り上げている。こちらの方は，共通事項の音楽の要素としてのリズムに対応した内容だといえよう。

③　階名と音名に関する内容と曲数

読譜において，最も重要な柱となるのがこの階名，音名に関する内容である。１，２学年における階名唱の導入に際し，各社に共通した特徴は，ドレミ視唱の練習を鍵盤ハーモニカの鍵盤と指番号に対応させて取り上げていることである。これは，階名の「ドレミ」を鍵盤と対応させ，目で見たり弾いたりして，音程間隔のイメージをより具体的につかめるようにとの工夫によるものであろう。しかし，鍵盤ハーモニカの鍵盤や指番号と対応した「ドレミ」は，事実上，階名の「ドレミ」ではなく，音名の「ドレミ」である。鍵盤を見ながら「ドレミ」を歌えば，児童たちは，ドレミを固定した鍵盤の位置に対応する音名として認識するだろう。階名に慣れるための練習の中で，歌唱の階名の「ドレミ」と，器楽の音名の「ドレミ」が混在してしまい，教師にとってもどちらを指導しているのかの位置づけが難しいのではないだろうか。

そもそも，階名と音名の違いについて教科書ではほとんど説明されていない。A 社では，階名と音名を区別するために音名には「イロハ」を使うという説明が，５学年の長調，短調の音階の項目中に発展事項として初めて出てくる。B 社の教科書は音名については触れておらず，C 社は５学年の，長調・短調の音階の楽譜の下に書かれた鍵盤上に，説明なしでイロハ（＝音名）のふりがながふられているのみである。更に，A，C 社共，実際に，器楽の楽譜の中でイロハ音名を使う指示は一度もないので，「ドレミ」が階名なのか，音名なのか，教科書からは読み取ることはできないのである。

「移動ド」（階名唱）と「固定ド」（音名唱）どちらで読譜指導を進めていくのかは，実は，教育現場における長年の懸案事項であり，試案以来「移動ド唱法を原則とする」とする学習指導要領に対して，現場では様々な混乱が教師らを悩ませてきた[13]。このような事態に対処するために，平成 10 年の改訂で「ハ長調・イ短調」だけを指導するという方針に変更されたというが，混乱した状況は未だ変わっていない[14]。実際の教育現場では，階名唱（「移動ドによる歌唱」）指導はほとんど行われておらず，「固定ド」による音名唱指導の方が多く実施されているという調査結果（小川，2005）も出ている[15]。現学習指導要領での「適宜，移動ド唱法を用いる」という慎重な言い回し，また各教科書での階名，音名どちらともとれるようなドレミの扱い方も，おそらくこのような現状を反映したものであるといえよう。

いずれにせよ，１，２学年では，各社共，読譜への導入として，階名のふりがなの付いた楽譜を

繰り返し使いながら徐々に慣れていくような構成になっている。中でも独自の工夫が見られるのが，A社の音の高さの練習に主眼をおいた項目である。2度，3度などの音程を片手で音高を示すジェスチャーやドレミ体操を使って感覚的に身に付けさせる訓練は，音程感覚を身に付け，正確な音程をとれるようにするために大変有効だと思われる。

3，4学年から視唱，視奏が開始するが，各社共，3学年で2曲程度の階名ふりがな付楽譜で練習した後に，ふりがななしで階名唱するような流れになっている。階名で歌うようにという指示のある楽譜は各社1曲程度で，それ以上の読譜の練習は，教師に任される形になっている。

4学年以降は，各社の対応が分かれる。A社の教科書には3学年から6学年まで一貫して「楽譜を読もう」という単元が含まれており，3学年では階名の説明，4学年では音名の説明も出てくる。B社では4学年以降，階名，音名を練習するための独立した単元や項目は見られない。C社も5学年で，ハ長調，イ短調の音階の階名の説明と関連して，イ短調の階名唱を指示している一曲のみである。

④　音階（長調・短調）に関する内容

音階に関する学習を取り上げる学年は，出版社により異なる。A社は4学年で長調の音階とハ長調について取り上げ，その中で音名（イロハ）についての説明も出てくる。その後，5学年で短調が出てきて，5，6学年の教科書の巻末にある音階の一覧表には，ハ長調，イ短調の他に，発展事項としてヘ長調とニ短調の楽譜も載せられている。B社は4学年の創作の単元で，5，6，7音音階を取り上げている。ハ長調の音階は5学年に，イ短調とハ長調の音階はペアで6学年に出てくる。C社では，5学年でハ長調とイ短調の音階がペアで取り上げられ，両者の「感じのちがい」を理解し，イ短調の曲を視唱するよう指示されている。

⑤　和音・和声に関する内容

和音・和声も扱う学年の指定がないが，各社共5学年から取り上げている。A社は5学年でハ長調の主要和音が出てきて，和音を使った伴奏付けの課題もある。6学年ではイ短調のよく使われる和音としてⅠ，Ⅳ，Ⅴ，V_7が出てくる。B社は5学年でハ長調の主な和音（Ⅰ，Ⅳ，Ⅴ，V_7），6学年でイ短調とハ長調の和音（Ⅰ，Ⅳ，Ⅴ，V_7）を取り上げているほか，循環コードから伴奏や旋律を作る課題も出てくる。C社は5学年でハ長調の主な和音（Ⅰ，Ⅳ，Ⅴ，V_7）を取り上げ，和音を使った創作課題がある。

⑥　共通事項の扱い

共通事項には，大きく分けて「音楽を形づくっている要素」と「音符，休符，記号や音楽にかかわる用語」の2領域がある。

まず，「音楽を形づくっている要素」（「音色，リズム，速度，旋律，強弱，拍の流れ，フレーズなどの音楽を特徴付けている要素」）に関しては，各社それぞれの工夫が見られる。まず３社共，６年間を通じて，要素名を含むいくつかの単元を設定している。その他では，A 社は，３学年から「音楽のしくみ」という項目を設け，「曲のまとまりのひみつ」（３，４学年），「曲のまとまりに気をつけて音楽を味わおう」（５，６学年）というタイトルで，旋律の分析と，それに基づいた創作活動の学習を設定している。B 社は，１学年から６学年まで「音楽のもと」という項目を設け，諸要素について説明している。１学年から４学年までは各要素の簡単な説明，５，６学年では具体的な曲を例に挙げて，分析，解説している。それと並行して，３学年から６学年までは，教材のページ右上の色枠内に，その曲で留意すべき音楽の要素名がインデックス風に列挙されている。C 社では，単元名で用いている以外の独立した扱いはない。

「音符，休符，記号や音楽にかかわる用語」では，各社共，分かり易い表記が工夫されている。A 社は「新しく覚えること」という括りのコラムで，対応する教材内に記号，用語等を取り上げている。B 社では，教材のページ右端の色枠内にインデックス風に関連する記号，用語等が書かれ，本文内のコラムで詳しく説明されている。C 社は「覚えよう」という括りのコラムで，記号，用語等を示している。

各記号，用語等が取り上げられる学年にも多少の違いがある。A 社は３学年で拍子，４学年で強弱記号が出てきて，３社の中で一番早い。B 社では，拍子は４学年，強弱記号は５学年の扱いである。C 社は，４学年で拍子，強弱記号共に出てくる。音符，記号等に関しては，各社共５学年までの間に，ほぼすべてが出揃う。

その他，学習指導要領には入っていないが，使われる頻度が高いため，発展事項として取り上げられているのが，全休符，二分休符，十六分休符である。A 社では３学年から６学年まで，教科書最後にある記号等一覧表の中に，この３つが掲載されている。B 社は，５，６学年の本文中と最後の一覧表に，発展事項として全休符のみ取り上げている。

５．まとめと今後の課題

以上，３社の教科書を，読譜に関するいくつかの項目別に検証してきた。文部科学省の検定基準を満たしたこれらの教科書は，当然のことながら学習指導要領の内容を反映しているが，読譜指導に関しては共通点と共に，それぞれの特色や違いが見られた。

A 社の教科書は，読譜指導に関して，質，量共に最も充実した内容となっている。６年間を通じて「音の高さに気をつけてうたおう」（１，２学年），「楽譜を読もう」（３，４，５，６学年）という独立した単元を設け，視唱や視奏，階名唱の練習を設定していることに見られるように，読譜指導における，基礎力と訓練の重要性を考慮に入れた構成になっている。発展事項で，階名と音名に

ついて説明しているのもA社のみである。

B社の特徴は，音楽を形づくる要素のコラムを1学年から取り上げ，各教材の横に要素名を列挙するなど，共通事項の音楽的要素に重きを置いた編集となっていることである。どの教材においても，関連する音楽的な要素を意識し，学ぶことができるという構成は，B社独自のものである。しかし，読譜に関しては，3学年までの基礎はしっかりと押さえているものの，4年以降は既習事項として，特に読譜を訓練するような項目は出てこない。

C社の教科書でも3学年までは他の2社とほぼ同じ体裁，量で，階名，リズムの練習用教材が取り上げられているが，4学年以降は，5学年で短調，長調の音階学習に付随した階名唱が取り上げられる以外は，読譜の訓練のための内容は見られない。

最後に，ここから見えてきた，いくつかの課題について考えてみたい。まず，各社共通した問題点の一つは，前述した階名（「移動ド」）の扱いについてである。三社共，1学年から，ドレミの階名唱の練習を，楽器の鍵盤と対応させながら導入している。このやり方だと必然的に，楽器の音名に馴染むというニュアンスが強くなってしまうので，階名唱の練習は，純粋な歌唱教材においてもっと多く取り上げるべきではないかと思われる。

また，階名唱法の大きなメリットは，相対的な音程関係や，メロディーの音楽的文脈を明確に理解できるということにある。読譜で扱う曲の調性がハ長調，イ短調のみだと，階名唱も音名唱も同じになってしまい，このメリットが十分に生かされない。教科書には，様々な調性の教材があるにもかかわらず，高学年になるにつれ読める楽譜の量が減ってくるという矛盾を解消するためにも，歌唱では移動ド唱法を使うことを確立した上で，扱える調性をもう少し広げていくべきなのではないだろうか。

次に，視唱，視奏の練習のための教材の分量についてである。1，2，3学年までは，各社共，文字譜，リズム譜など音やリズムを読めるようになるための教材を十分に取り上げているのだが，4学年以降は，A社以外はそれがほとんどなくなってしまう。3学年で初めて視唱，視奏が出てきて，一度その学習をした後は，既習事項として取り上げられない，という流れだと，読譜学習として重要な過程が欠けることになってしまう。読譜ができるようになるプロセスとして，メロディーを階名（あるいは音名）で歌える，メロディーが階名（あるいは音名）に翻訳して聞こえてくる，という予備段階を経て，階名を音に翻訳できて初めて読譜となるというが[16]，1，2学年で慣れてきた階名唱の感覚は，3学年以降は音符を読む訓練を数多く積むことによって，初めて実際に楽譜を読める能力として育っていくのである。

4学年以降は，他の学習内容も増えてくるので，読譜は教師の判断で適宜取り上げるという配慮なのかもしれないが，児童の読譜力がかなり不足しているという現状を考えると，教科書にもう少し積極的に読譜の訓練のための項目，教材が取り上げられても良いのではないか。

同様のことは，共通事項の音符，休符，記号等の扱いについてもいえる。各社共，音符，記号等

を大変見やすく，分かり易く示しているのであるが，教材に付随した一回限りの単発的な取り上げ方である。馴染みの薄い記号等を実際に身に付けさせるためには，繰り返し学習させることが必要不可欠である。これをすべて教師任せにするのではなく，教科書の中でも繰り返し取り上げるなど，何らかの工夫があると良いのではないだろうか。

歌と移動ドを用いた，優れた音楽教育法で知られるハンガリーの作曲家コダーイは，読譜指導について，「子どもの時代から，基礎を何年もかかって訓練と系統的教育をとおして，浸み込ませなければならない。」[17] と述べている。現行の学習指導要領，教科書の読譜指導に関する内容を検証した結果，個々の事項においては様々な工夫が見られたにもかかわらず，この「系統的教育」，「訓練」という二つの柱がはっきりと見えてこなかった。読譜力は，音楽表現の幅を広げるばかりでなく，音楽的語彙や構造を理解する上でも必要不可欠な能力である。その重要性をしっかりと認識した上で，今後，学校教育において，より系統立った読譜教育法が確立されていくことが望まれる。

注

(1) 杉江淑子「子どもや若者の「聴く力」と読譜の役割」『音楽教育実践ジャーナル』Vol. 7 no. 1 2009.8　日本音楽教育学会　p. 7
(2) 杉江淑子「音楽教育」滋賀大学付属図書館編『近代日本の教科書のあゆみ―明治期から現代まで―』2006　サンライズ出版　p. 158
(3) 文部省「学習指導要領　音楽編」（試案）昭和 22 年度　学習指導要領データベース http://www.nier.go.jp/guideline/〈2013.11.7 確認〉
(4) 文部省「小学校学習指導要領　音楽科編」（試案）昭和 26 年度改訂版　同上
(5) 文部省「小学校学習指導要領」昭和 33 年改訂　同上
(6) 文部省「小学校学習指導要領」昭和 43 年 7 月　同上
(7) 文部省「小学校学習指導要領」昭和 52 年 7 月　同上
(8) 文部省「小学校学習指導要領」平成元年 3 月　同上
(9) 文部省「小学校学習指導要領」平成 10 年 12 月　同上
(10) 杉江　上掲書　p. 7
(11) 文部科学省「新学習指導要領・生きる力」「学習指導要領 Q & A　7. 音楽に関すること」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/qa/07.htm〈2013.11.7 確認〉
(12) 文部科学省「新学習指導要領・生きる力」第 2 章　第 6 節　音楽　平成 20 年 3 月
(13) 小川容子「公教育における音名唱指導の実態―質問紙調査による移動ド・固定ド唱法の比較―」『鳥取大学地域楽部紀要』第 1 巻　第 2 号　2005 p. 41
(14) 同上　p. 41
(15) 同上　p. 51
(16) 今井靖親・木村順子「読譜学習に関する心理学的研究」『奈良教育大学研究所紀要』Vol. 19 1983.3 pp. 115-116
(17) コダーイ・ゾルターン著　中川弘一郎編・訳『コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践―生きた音楽の共有をめざして―』全音楽譜出版社　1980 p. 164

参考文献

尾見敦子「提言「読譜教育」の 4 つの視点―ハンガリーの音楽教育に学ぶもの」『音楽教育実践ジャーナル』Vol. 7 no. 1 2009 pp. 76-86

尾見敦子「なぜ音楽の授業で読譜力が養われないのか―ハンガリーの音楽教科書が語るもの」『音楽教育実践ジャーナル』Vol. 9 no. 2 2012 pp. 58-66
吉田孝「制度の中の音楽科教科書」『音楽教育実践ジャーナル』Vol. 9 no. 2 2012

教科書
小原光一他監修『小学生の音楽　1～6』教育芸術社　2013
三善晃監修『音楽のおくりもの　1～6』教育出版社　2013
湯山昭他著『新しい音楽　1～6』東京書籍　2013

Present Conditions and Issues of Teaching How to Read Music in Music Education in Elementary Schools :

Analysis of Current Music Textbooks for Elementary School

Mariko IKEGAMI

Abstract

Teaching students to read music has been problematic for a long time in music education. There are so many students who can't read music even after nine years of compulsory education. However, teachers have not been able to come to a consensus on a solution. This thesis examines the issues concerning the teaching of reading music through analyzing the content of reading music in all music textbooks for elementary school, concluding that, for lower grades, the content of the textbooks does not vary much in quality and quantity. However, for higher grades, there can be significant differences in quantity. We also see some concerns with the 'movable do' and the lack of sufficient time to practice reading music.

Key words; Teaching how to read music, music textbooks for elementary school, the movable do